甲府市文化財調査報告 13

久保之沢遺跡

— 農道改良工事に伴う発掘調査報告書 —

2001

甲　府　市
甲府市教育委員会

序

甲府市北部には、傾斜地を利用して広がる棚田がみられます。その独特の景観美の中には先人の英知と努力が、更には伝統風土が今日に伝えられております。「田毎の月」などと歌に詠まれ、美しい曲線を描き天に向かって広がる棚田は「日本の原風景」などと形容され、文化的な観点から保全に向けた取り組みが各地で行われ始めております。また、すでに遠く海外では、文化遺産としてユネスコの世界遺産に登録されたものもあると聞き及んでいます。

現在、全国的に地域の歴史や景観、伝統文化そして自然が資源として見直され、活用されつつあります。このことは歴史や伝統文化、更には風土が、地域においていかに重要であるのかを改めて実感させてくれます。

本報告書は、農道改良工事に先立ち、平成11年度に実施された久保之沢遺跡の発掘調査報告書であります。遺跡は本市北部地域に位置し、開発の手が及んでいない豊かな自然と、貴重な文化遺産が数多く存在する地域にあります。小規模な調査ではありましたが、縄文時代以来、平安時代・中世戦国時代に至るまで生活を営み続けた人々の痕跡が確認され、連綿と続いてきた歴史の一端が明らかとなりました。

古くから歴史のあるこの地域で、今回、発掘調査が行われたことは誠に意義深く貴重なものでありました。本報告書が学術研究深化への一助になるとともに、教育資料へも活用され、郷土の歴史と文化を再認識する機会となれば、この上ない喜びであります。

最後になりましたが、発掘調査から報告書刊行まで多大なる御理解と御協力をいただきました地元下帯那地区の皆様、及び御指導・御鞭撻を頂いた関係諸機関・関係者各位に感謝申し上げますとともに、衷心より厚くお礼申し上げます。

平成13年３月

甲府市教育委員会
教育長　金　丸　　晃

例　　言

1．本書は山梨県甲府市下帯那町字久保之沢地内に所在する久保之沢遺跡の発掘調査報告書である。
2．本調査は農道改良工事に伴う発掘調査であり、甲府市教育委員会が調査を実施した。
3．本書に関わる作業の実施期間は以下の通りである。

試掘調査	平成11年５月６日～平成11年５月31日
本 調 査	平成12年２月21日～平成12年３月24日
整理作業	平成12年４月１日～平成13年２月28日

4．発掘調査は試掘調査を伊藤正彦、本調査を伊藤正彦・山﨑雅恵が担当した。
5．本書の編集・執筆は、市瀬文彬（文化芸術課長）を責任者とし、伊藤正彦・山﨑雅恵が分担した。文責は各文末に記した。
6．本書の挿図は藤井武美・伊藤正彦・山﨑雅恵が作成した。
7．本書に関わる出土遺物及び記録図面・写真等は甲府市教育委員会で保管している。
8．発掘調査及び報告書作成に際して次の方々からご指導ご協力を賜った。厚くお礼を申し上げる次第である。

角田　区　　末木義朝　　早川建夫　　保延幸雄

凡　　例

1．本書に掲載した遺構番号は、調査現場において付けたものである。
2．遺構名は各遺構の形状・検出状況に応じて調査現場において付けたものである。
3．全体図、遺構・遺物実測図の縮尺は図中に表示した通りである。
4．遺構断面図における水平数値は、海抜高度を示し、単位はｍである。
5．報告書中の方位は磁北を示している。

発掘調査参加者

小沢四郎　川口格一　佐田　昇　末木義光
岸本美苗　佐田金子　花曲敬子

目　　次

序
例　言
凡　例
目　次

第１章　調査の概要
　第１節　調査に至る経緯……1
　第２節　調査の方法……1
　第３節　調査の経過……1

第２章　遺跡の環境
　第１節　久保之沢遺跡の立地……4
　第２節　久保之沢遺跡の歴史的環境……4
　第３節　久保之沢遺跡と丸山貯水池(千代田湖)築造……7

第３章　調査の成果
　第１節　基本層序……8
　第２節　遺構と遺物……8
　　(1)　水路跡……8
　　(2)　土　坑……8
　　(3)　ピット……10
　　(4)　遺構外出土遺物……11

第４章　ま　と　め……17

挿図目次

第１図　試掘坑配置及び調査区位置図……2
第２図　遺跡全体図及び土層堆積図……3
第３図　久保之沢遺跡と周辺の遺跡分布図……5
第４図　久保之沢遺跡と移転代替地平面図……7
第５図　久保之沢遺跡周辺地形図(明治42年)……7
第６図　水路跡実測図及び出土遺物……9
第７図　１号～６号土坑実測図……12
第８図　７号～９号土坑実測図及び土坑出土遺物……13
第９図　１号～11号ピット実測図……14
第10図　出土遺物……15

第１章　調査の概要

第１節　調査に至る経緯

平成11年２月、甲府市産業振興労政部より農道改良工事に際して、埋蔵文化財の取扱について事前協議の申し入れがあった。教育委員会では、開発対象地一帯が周知の埋蔵文化財包蔵地として遺跡分布図に掲載されていないものの、現地踏査に際して土器片の散布を確認したことから、埋蔵文化財有無確認のため試掘調査が必要であることを回答した。書類手続き後の平成11年５月、開発対象地の試掘調査を実施し、部分的に遺跡の存在を確認した。その結果をもとに、新たに協議を行い、農道改良工事に先立って遺跡が確認された範囲のみを対象として発掘調査を実施し、記録保存をすること、整理作業は平成12年度に実施することとした。

発掘調査は平成12年２月21日から開始し、３月24日に終了した。引き続き遺物・記録図面等の整理作業を行い、報告書作成までの作業が終了したのは平成13年３月であった。

（伊藤）

第２節　調査の方法

調査区は試掘調査の成果に基づき、調査が必要と判断した約63㎡（幅約2.5ｍ×長さ25ｍ）を対象とした。遺構確認面は地表下約50㎝～60㎝であり、この面より若干高めに残しながら重機で表土はぎを行い、以下の層を人力により精査・掘削している。

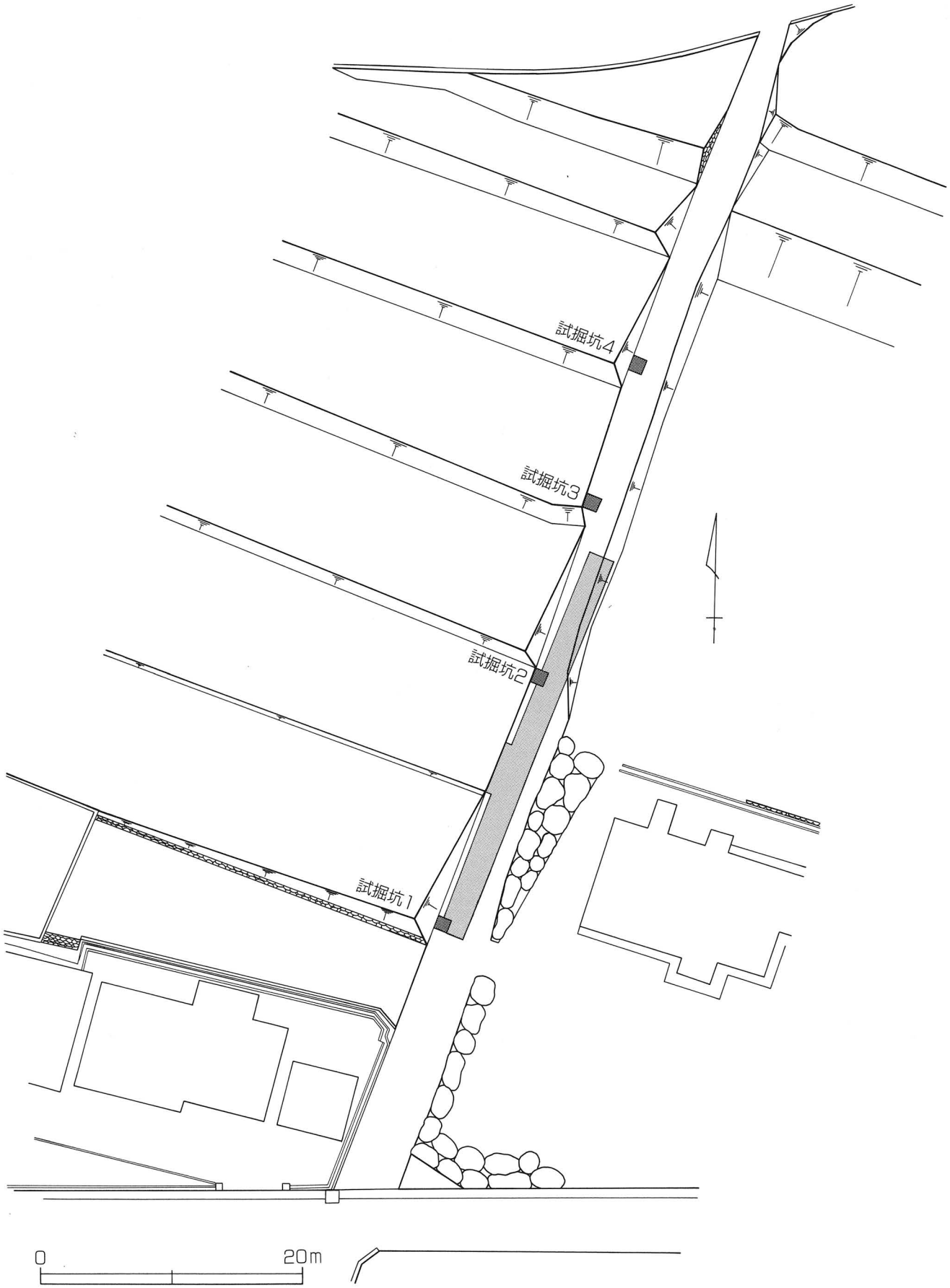
調査区はグリット設定は行わず、南北に便宜上６ｍ間隔の区画を設定し、北より１～４区として調査を行った。出土遺物は遺構内出土のものを除き、一括して取り上げを行っている。

（山﨑）

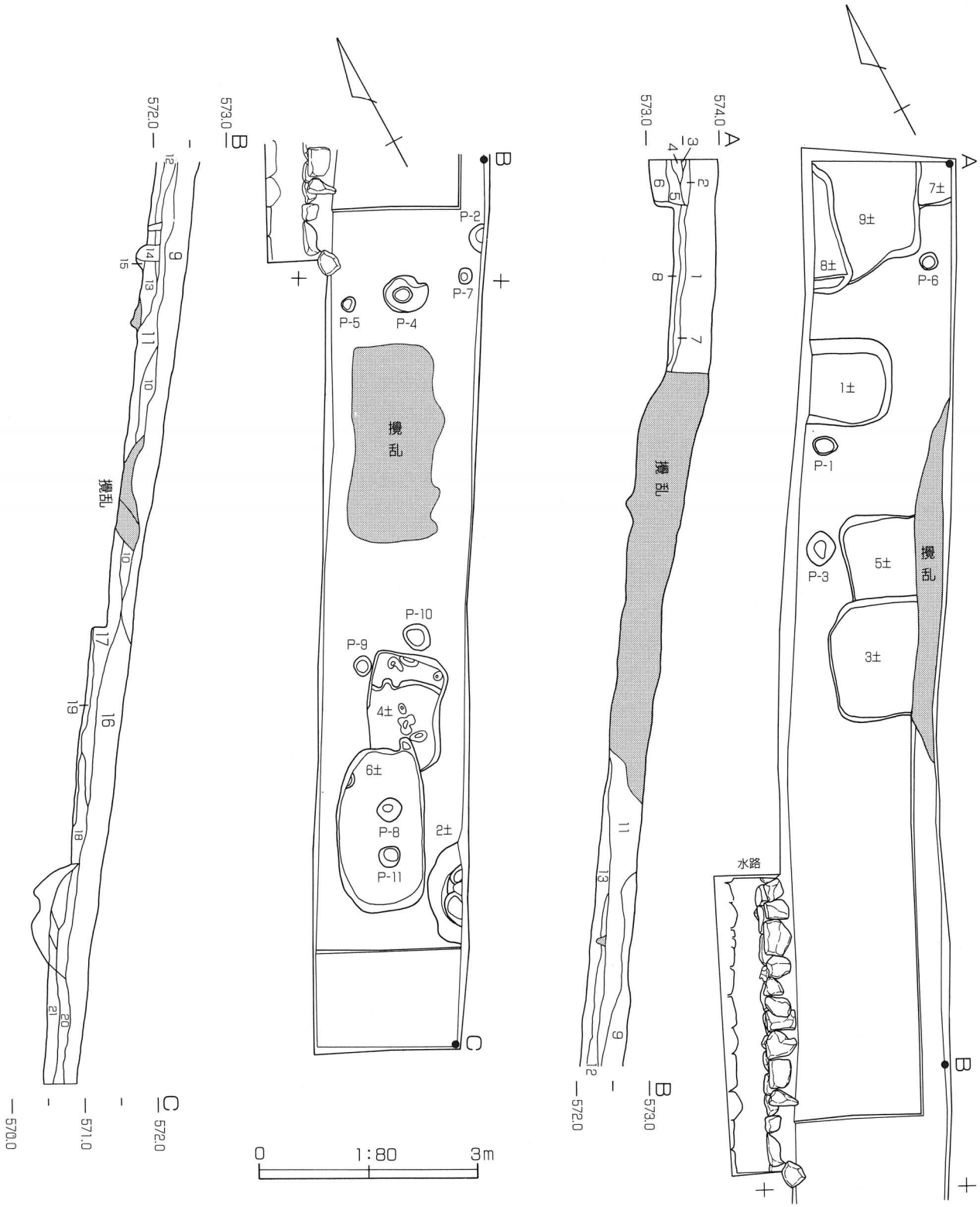
第３節　調査の経過

２月21日　発掘現場に道具・機材搬入
２月22日　重機にて表土剝ぎ、調査区設定
２月24日　調査区北側に重複して遺構確認
２月25日　１号土坑、１号ピット確認
２月28日　１号土坑完掘、調査区南側に攪乱
２月29日　２号土坑完掘、３号ピット確認
３月１日　４・５号ピット確認
３月３日　４・５号ピット完掘、６号ピット確認
３月６日　３号ピット完掘、７号ピット確認
３月７日　３号土坑確認
３月９日　３号土坑完掘、水路検出
３月10日　８号～11号ピット、４・５号土坑確認
３月13日　９号～11号ピット完掘
３月15日　５号土坑、８号ピット完掘
３月17日　７号～９号土坑確認
３月21日　６号～９号土坑完掘
３月22日　全体写真撮影・全体図作図
３月23日　調査区埋戻し

（伊藤）



第１図　試掘坑配置及び調査区位置図



1. 表土
2. 茶褐色粘土層～炭化物・焼土・褐色粘土が混る。粒子やや細かく、粘性あり、しまりあり。
3. 暗茶褐色粘土層～褐色粘土が混る。粒子細かく、粘性あり、しまりあり。
4. 暗茶褐色粘土層～褐色粘土が混る。粒子やや粗、粘性弱く、しまりやや弱い。
5. 暗茶褐色粘土層～褐色粘土が混る。粒子やや粗、粘性強く、しまりあり。
6. 黒褐色粘土層～褐色粘土が混る。粒子やや粗、粘性強く、しまりあり。
7. 茶褐色粘土層～黄褐色細砂を若干含む。粒子やや粗、粘性あり、しまりあり。
8. 暗茶褐色粘土層～粒子やや粗、粘性あり、しまりあり。
9. 黄褐色粗礫層～撹乱層となる。
10. 暗茶褐色粘土層～粒子細かく、粘性強い、しまり弱い。
11. 茶褐色粘土層～撹乱をかなり受けている。旧表土となるか。褐色土を多く含み、炭化物が若干混る。粒子細かく、粘性あり、しまり弱い。
12. 暗茶褐色土層～粒子細かく、粘性強い、しまり強い。
13. 黒褐色粘土層～粒子細かく、粘性・しまり強い。
14. 黒褐色粘土層～粒子細かく、炭化物を若干含む。粘性強く、しまりあり。
15. 暗茶褐色粘土層～粒子細かく、粘性あり、しまり強い。
16. 茶褐色粘土層～炭化物を少量含み、砂粒が混る。粒子やや粗、粘性・しまりあり。
17. 暗茶褐色弱粘質土層～炭化物を多く含み、粒子やや粗。粘性・しまり弱い。
18. 暗茶褐色粘土層～炭化物を僅かに含み、粒子やや粗、粘性強く、しまりあり。
19. 黒褐色粘土層～炭化物・焼土若干含む、粒子細かく、粘性強い、しまりあり。
20. 暗茶褐色粘土層～褐色粘土を多く含み、炭化物・焼土が多く混る。粒子やや粗、粘性強く、しまりあり。
21. 黒褐色粘土層～褐色粘土を含み、炭化物・焼土が混る。粒子やや粗、粘性強く、しまりあり。

第２図　遺跡全体図及び土層堆積図

第２章　遺跡の環境

第１節　久保之沢遺跡の立地

久保之沢遺跡は山梨県甲府市下帯那町内に所在する。下帯那町は甲府盆地の北端を縁どる水ケ森山地の一部、帯那山の西南裾に位置し、地形的には谷底低地、段丘部、山地と大きく３つに分けることができる。

遺跡は、かつての荒川源流の一つ、帯那川によって形成された谷底低地東側の段丘上に立地する。標高は約530ｍであり、急斜面上に位置する。周辺は畑地であり、段丘斜面にあたる部分では棚田が営まれている。遺跡の西南にあたる低地には、昭和12年に千代田湖が造成され、甲府市の水源地の一つとなっている。下帯那町は、花崗岩地帯で地味のあまりよくないこの地域としては比較的肥沃な土地柄であるが、一帯には江戸時代、溜井が多く造られており、水利の悪い土地柄であったことが窺える。現在も河川上流域には大正池、昭和池等の溜め池がつくられ、利用されている。　（山﨑）

第２節　久保之沢遺跡の歴史的環境

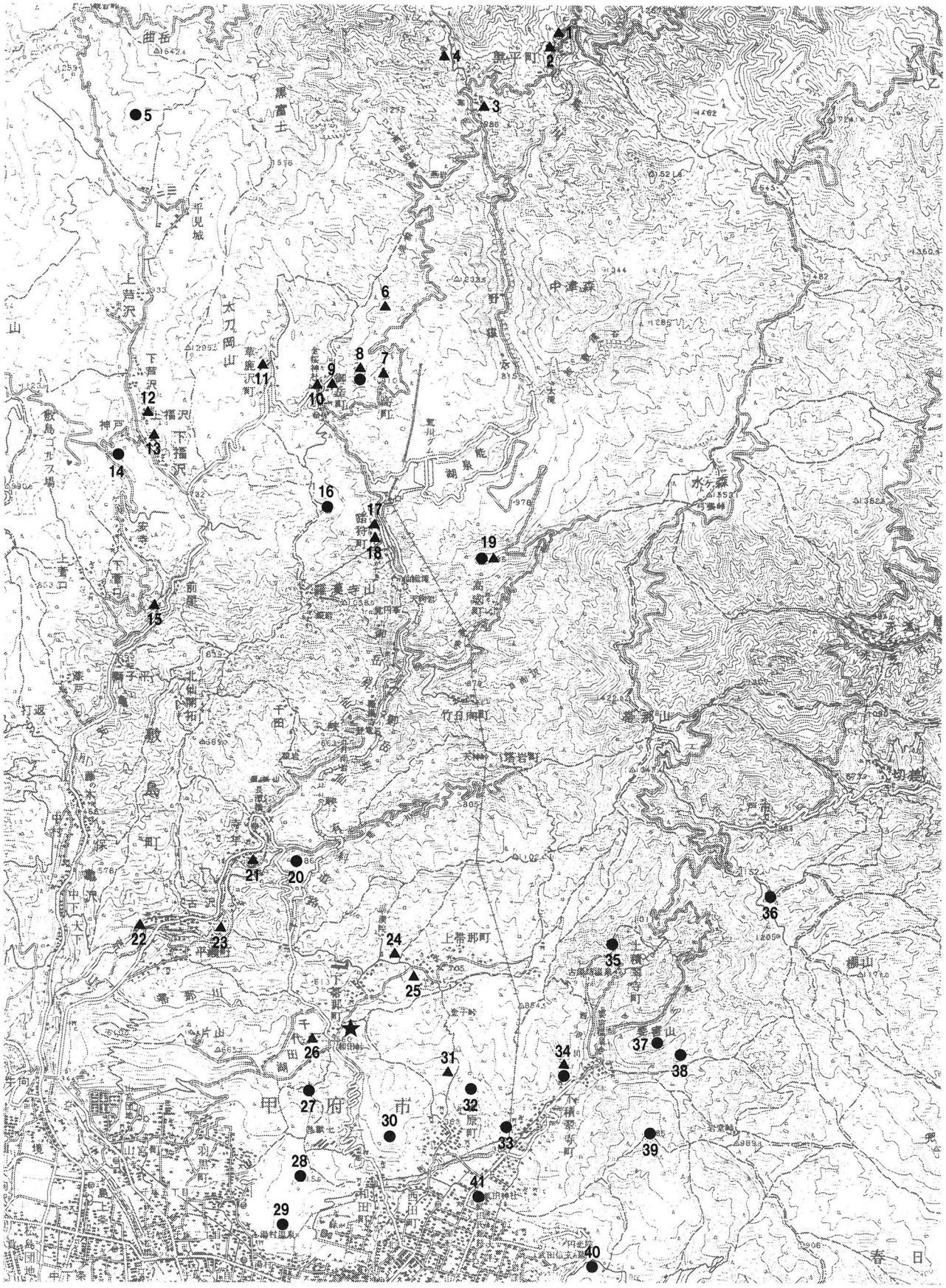
久保之沢遺跡が位置する甲府盆地北部山間地には、市内で最も古く縄文時代早期より人々の足跡が確認されている。それ以後、今日まで人々の生活が間断なく営まれてきたことは各時代にわたる遺跡分布からある程度窺い知ることができる（第３図）。一方で各時代の遺跡分布には時代により濃淡があり、一様な展開を見せてはいない。

縄文時代には、急峻な山々が連なる山間地の山腹、荒川及びその支流域の河岸段丘上に形成された狭小な平坦地に遺跡は存在する。北部山間地の縄文遺跡を調査した数少ない事例として、甲府市高町に存在する高町遺跡がある。住居址の検出が見られ縄文中期後葉から後期にかけて居住地として利用されていた状況が確認された。すでに、市内では荒川上流域の山間地、盆地平坦地との境をなす山麓部及び扇状地地帯に縄文時代の遺跡が分布する傾向が指摘されているが、これらの遺跡は小規模で短期的に営まれた集落など、一時的な生活の場として捉えられている。

その後、弥生時代から古墳時代にかけて盆地北部一帯には丸山遺跡・富士塚古墳・疣石古墳等僅かな遺跡が確認されるのみとなる。その大部分は沖積地の微高地上、河川の自然堤防上、盆地北縁の山裾に集中している。

荒川上流域の山間地に再び遺跡が急増するのは奈良・平安時代からである。山梨県内でも八ケ岳山麓部・郡内及び富士北麓地域では山間地や小河川を遡った谷奥部に遺跡が急増している現象が明らかとなっており、この時代の一つの特色となっている。また、盆地北部の山間地には一般集落以外にも宗教関係遺跡が知られている。一の森経塚遺跡は本県初の考古学的調査が実施された経塚遺跡であり、金峰山山頂・金桜神社境内などでは平安期の土器片が採集され、すでに古代以来、信仰の場となっていたことが窺われる。その他、川窪城山山頂・湯村山山頂など眺望のすぐれた山頂からも土器片が採集されており、信仰に関係した遺跡の存在が予測されている。

中世遺跡では城館・烽火台が多く知られている。戦国大名武田氏の居館、躑躅ヶ崎館を中心に詰城の要害城、支城の川窪城・湯村山城を築き、更には相川扇状地周辺の山麓・北部山間地には、眼下に集落を見下ろし、眺望のすぐれた山頂に砦や烽火台を設置し一帯の要塞化を図っている。烽火台は決して単独では機能し得ず、群として相互に連携を保ち始



第３図　久保之沢遺跡と周辺の遺跡分布図

めて効果が発揮できるものである。烽火台を守備し、往還筋とともに国境警備にあたっていたのが御岳衆と呼ばれるこの地域一帯に蟠距した地域武士団である。武田家滅亡後の天正壬午の乱に際して、徳川家康が御岳衆に対し御岳足沢小屋(平見城の烽火台か)・長子の番所の守備を命じているのが確認できる。また、文献史料から盆地北部の山間地に限って、今日まで続く地名を拾い出してみると、すでに15世紀中頃『一蓮寺過去帳』に「御岳」・「吉沢」・「芦沢」などが確認され、戦国期の史料には「積翠寺」・「塚原」・「和田」など相川扇状地一帯の地名とともに「亀沢」・「福沢」・「帯那」・「平瀬」・「惣加沢(草鹿沢)」など荒川上流域の地名が確認できる。

江戸時代初頭、現在の甲府市域には85の村が存在した。市域は南北に細長く、盆地南端の大津村から北部山間地の最奥部黒平村までの標高差は約900mを測る。江戸時代、市域の村々には低地の水田地帯から山村の畑作・山稼ぎまで多様な生産活動が展開した。盆地北部の山間地には、ほぼ荒川を境にして、その東側が山梨郡北山筋に、西側が巨摩郡北山筋に属し26の村々が存在した。『甲斐国志』から江戸時代後期、文化年間(1804～14)の石高・家数及び人数が判明する。26か村の合計、石高3,661石余・家数1,167軒・人数4,482人を数える。石高にして50石以下、家数20～30軒の村が大部分を占めている。

久保之沢遺跡が位置する下帯那町は荒川の支流帯那川の中流にある。戦国時代、天正4年(1576)の武田勝頼印判状に「帯那之郷」と見えるのが初見史料となる。その他、戦国時代の史料には「小尾奈(帯那)之内平瀬」、「下帯那内ニ而」などと見える。荒川近傍の平瀬一帯(現甲府市平瀬町)までその郷域に含まれ、更に上・下に分かれていたことが判明する。『甲斐国志』には、下帯那村を耕地も田の方が多く、山地にしては肥沃な地質としている。

第3図中に示した遺跡の内訳は、以下のとおりである。

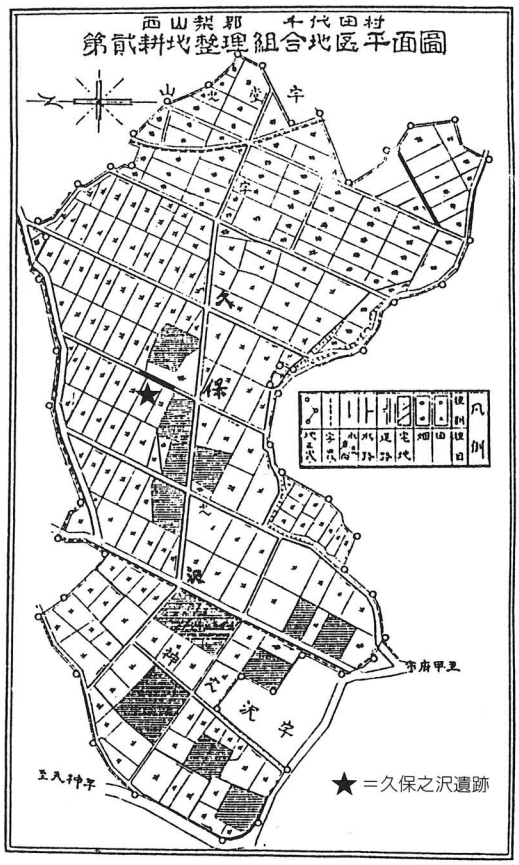
1．宮前遺跡（縄文時代早期）
2．道上遺跡（縄文時代）
3．湯平(宮本鉱泉)遺跡（縄文時代中期）
4．判平遺跡（縄文時代早・前・中期）
5．平見城の烽火台（中世）
6．猫坂遺跡（縄文時代中・後期）
7．高町遺跡（縄文時代中・後期）
8．御岳城山（中世）
9．東村遺跡（奈良・平安時代）
10．金桜神社境内遺跡（奈良・平安時代）
11．草鹿沢町遺跡（縄文時代中期）
12．上福沢遺跡（平安・中世）
13．栩木平遺跡（縄文・平安・中世）
14．福沢の烽火台（中世）
15．芝田遺跡（縄文時代）
16．猪狩城山（中世）
17．中棚遺跡（縄文時代中期）
18．清水遺跡（奈良・平安時代）
19．川窪城山（奈良・平安・中世）
20．平瀬の烽火台（中世）
21．寺平遺跡（縄文・奈良・平安時代）
22．吉沢Ａ遺跡（縄文・奈良・平安時代）
23．吉沢Ｂ遺跡（縄文・奈良・平安時代）
24．富士塚古墳（古墳時代）
25．牛石遺跡（奈良・平安時代）
26．丸山遺跡（縄文時代中期・弥生時代後期）
27．和田城山（中世）
28．法泉寺山の烽火台（中世）
29．湯村山城跡（中世）
30．小松山烽火台（中世）
31．疣石古墳（古墳時代）
32．鐘撞(推)堂（中世）
33．不動ヶ崎（中世）
34．一の森経塚(一の森烽火台)(平安・中世）
35．関口（中世）
36．太良峠の烽火台（中世）
37．要害城（中世）
38．熊城（中世）
39．積翠寺山の烽火台（中世）
40．茶堂峠の烽火台（中世）
41．躑躅ヶ崎館跡（中世）

第３節　久保之沢遺跡と丸山貯水池（千代田湖）築造

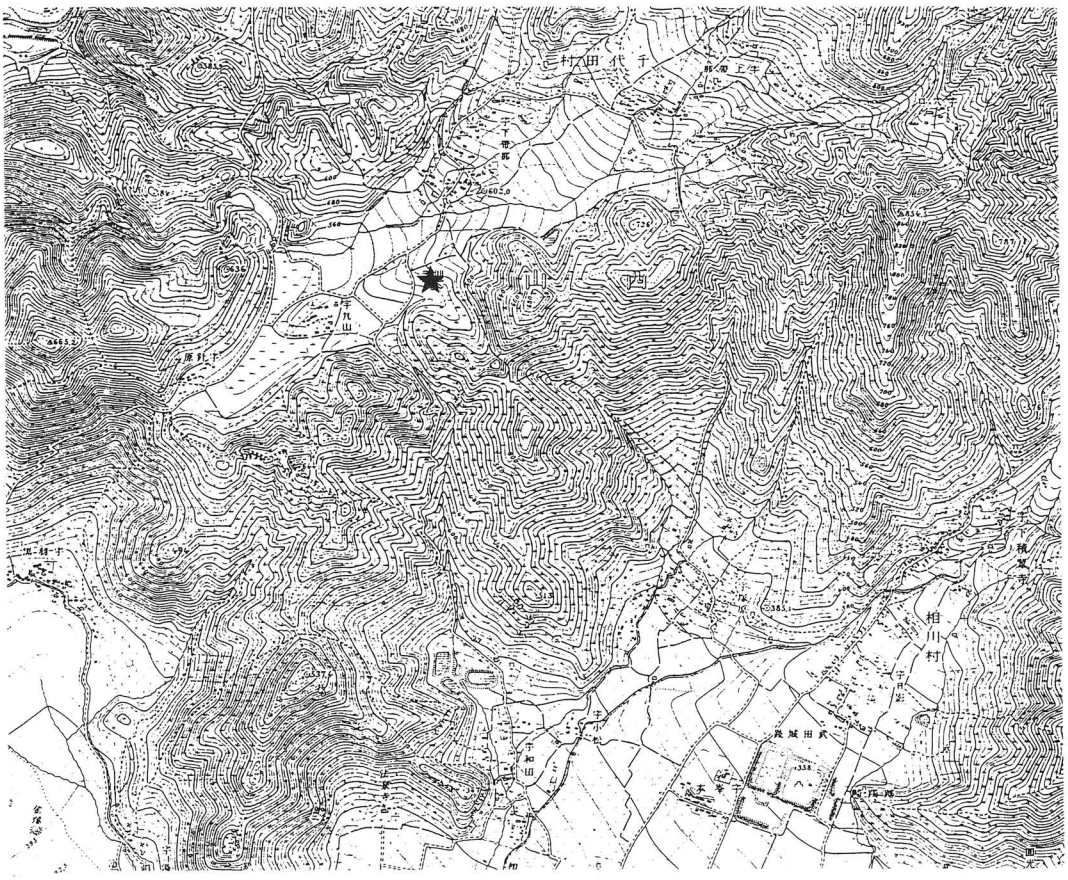
昭和12年（1937）、丸山貯水池（千代田湖）の完成は下帯那町にとって大きな耕地変化をもたらした。明治42年（1909）、陸地測量部作成の地形図（第５図）では北東から南西方向に帯那山から続く細長い段丘が見られる。まさに『甲斐国志』に載る、「帯那」の名の由来となった、耕地が帯のように長い地形となっている。

丸山貯水池築造は、昭和５年（1930）甲府市の水道拡張計画に端を発する。紛糾をきわめたこの計画の解決策として、新たに県当局によって計画されたのが農業用水専用貯水池としての丸山貯水池築造である。下帯那町丸山・針原地区の民戸移転及び水没潰地を含む内容であり、そのための移転代替地と耕地整理を必要とした。移転代替地は、今回発掘調査が実施された字久保之沢地区周辺であった（第４図）。

こうした土地改変の痕跡は試掘調査時に確認されている。農道改良工事の対象地、全長約54ｍのうち、その北側上半の約26ｍは地表下約１ｍまで掘削を受けた痕跡があり、今回発掘調査が必要と認められたのはその南側であった。　（伊藤）



第４図　久保之沢遺跡と移転代替地平面図
（角田区氏提供図を加筆転載）



第５図　久保之沢遺跡周辺地形図（明治42年）★＝久保之沢遺跡

第３章　調査の成果

久保之沢遺跡の発掘調査において確認された遺構は水路１条、土坑９基、ピット11基である。遺構に伴う遺物はわずかであり、時期の不明な遺構が多い。試掘、本調査あわせて発見された遺物は遺構内出土のものが55点、遺構外出土のものが114点である。遺物は平安時代のものが最も多く、縄文、中世の遺物も若干出土している。

第１節　基本層序（第２図）

調査区の層序は、西南方向にややきつい傾斜をなして堆積しているが、大きな変化はなくほぼ３層から４層に分けられる。地表から30cm程までは表土・耕作土であり、機械による除去作業ではこの層まで掘削している。主な遺構確認面は、この表土・耕作土を剝いだ暗茶褐色粘土層上面である。やや粒子の粗い粘土層で調査区の南側の堆積層では炭化物が多く混じる。この層の下には黒褐色粘土層が堆積しており、調査区の北から８ｍ付近以降から確認できる。この堆積層は粘性が強く、炭化物が多く混じる。一部遺構を検出しているが３層が漸移的に変化したものと判断している。明確に包含層と判断できる層はみられず、耕作などに伴う掘削により、表面はかなりの改変を受けているものと思われる。(山﨑)

第２節　遺構と遺物

(1) 水路跡（第６図・図版１）

調査区西側で検出された。開発対象地を南北方向に流下する。すでに試掘調査の段階で確認していたが、水田耕作に伴う現代の水路跡と判断したため一部のみの検出である。確認した規模で幅28～45cm、深さ35cmを測り、水路底はほぼ平坦である。斜面の傾斜に合わせて石を積んでいるが、西側の畑地側石積は高さ60～90cm、３～５段の石積が石尻を下げながら、僅かに控えを取って積まれている。東側の通路側石積は低く、高さ25～48cm、１～２段程度の石積がほぼ垂直に積まれている。西側の畑地はもと水田だったらしく、そのため西側石積は天端を揃えて積まれている。水路底から１～２段程に大振りの石を使用し、それ以上には拳大から幼児頭大の石を使用している。積み直しに伴う結果であろうか、西側石積には底から45cm程度の高さで横目地が通っている。

出土遺物は平安時代の土師器から近現代の陶磁器まで15点が出土している。いずれも破片資料であるが、図化可能なものを実測した。

遺構の時期は、前述したように丸山貯水池築造に伴う移転代替地に構築されているため、現代に属す。　(伊藤)

(2) 土坑

１号土坑(第７図・図版１)

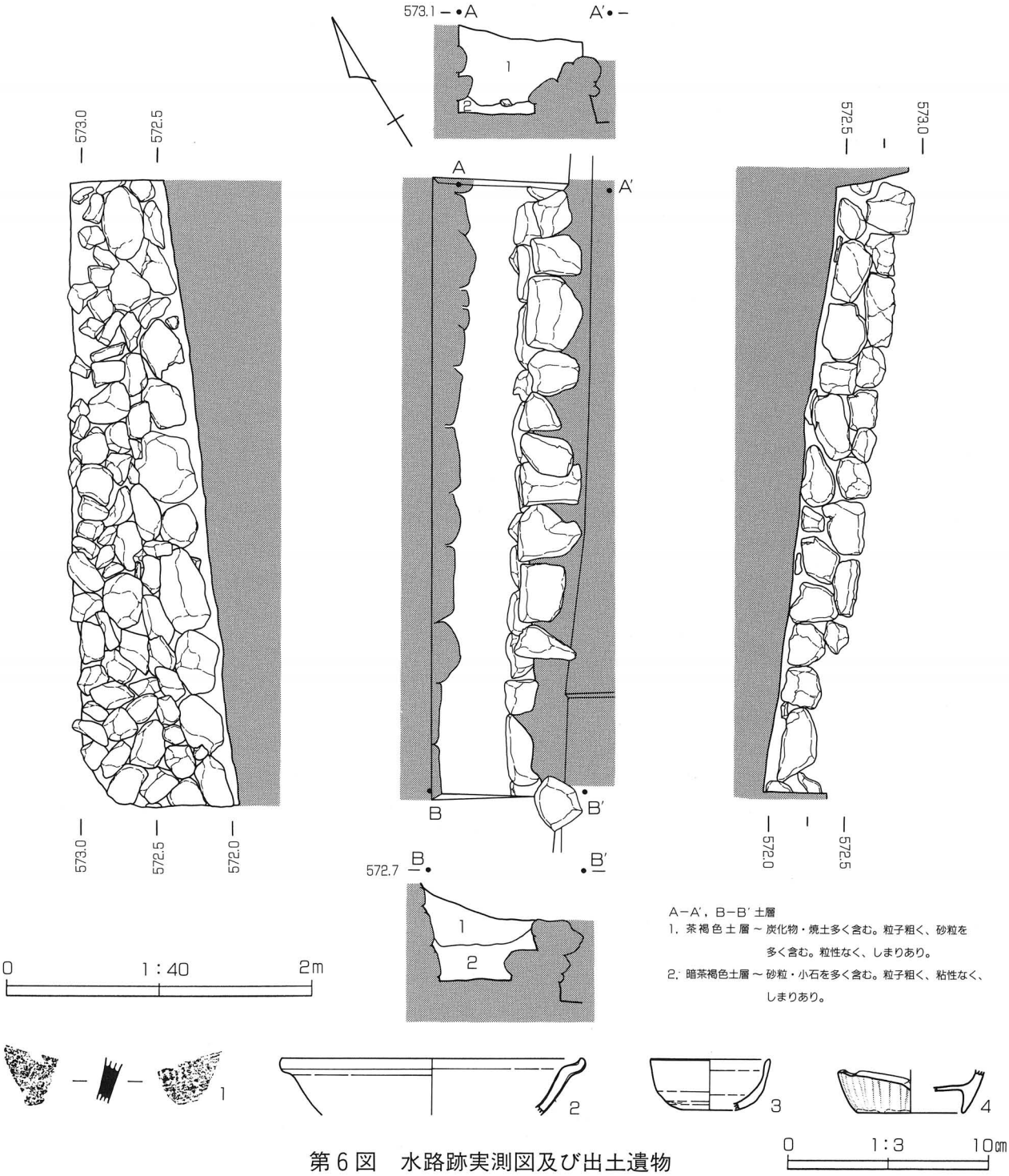
調査区北側で検出した。調査区外に一部広がる。確認した規模、長径110cm、短径118cm、深さ27cmを測る。平面は長方形、断面方形をなし、底はほぼ平坦である。

出土遺物は土師器破片が１点出土しているのみである。

２号土坑(第７図・図版１)

調査区南側で検出した。調査区外に一部広がる。確認した規模、長径130cm、短径40cm、深さ55cmを測る。平面円形、断面丸底形となる。

出土遺物は土師器破片が１点出土しているのみである。



第6図　水路跡実測図及び出土遺物

3号土坑(第7，8図・図版1)

調査区北側で検出した。5号土坑と重複し、東側は攪乱を受けている。一部、調査区外に広がる。確認できた規模、長径149cm、短径165cm、深さ58cmを測る。平面は長方形をなし、断面はほぼ壁の直立する方形を呈す。底はほぼ平坦である。

出土遺物は、平安時代の土師器片と中世かわらけ片が9点出土している。

4号土坑(第7図・図版1)

調査区南側で検出した。6号土坑と重複する。長径158cm、短径98cm、深さ7cmを測る。平面は不整円形、断面皿状であり、植栽の痕とも考えられる。遺物は出土していない。

5号土坑（第7，8図・図版1）

調査区北側で検出した。3号土坑と重複し、東側は攪乱を受けている。一部、調査区外に広がる。確認できた規模は、長径約132cm、短径約110cm、深さ51cmを測る。平面は長方形、断面はほぼ壁の直立する方形であり、底は平坦である。

出土遺物は、平安時代の土師器片が17点出土している。いずれも内外面がハケメ調整された、いわゆる甲斐型の甕となるものである。同一個体となるであろう。

6号土坑（第7，8図・図版1）

調査区南側で検出した。4号土坑、ピット8、ピット11と重複する。長径222cm、短径117cm、深さ32cmを測る。平面は長楕円形であり、断面鍋底状を呈す。

出土遺物は、平安時代の土師器片が4点出土している。

7号土坑（第8図・図版2）

調査区の最も北側で検出した。8号土坑、9号土坑と重複する。一部調査区外に広がっている。確認できた形状で、東西190cm、南北58cm、深さ55cmを測る。南側の立ち上がりのみ確認しており、形状は不明である。断面は壁がほぼ直立する方形であり、底は平坦である。

出土遺物は中世かわらけ片が5点出土している。2点のみ図化を行った。

8号土坑（第8図・図版2）

調査区北側で検出した。7号土坑、9号土坑と重複する。一部調査区外に広がっている。確認できた形状で東西37cm、南北177cm、深さ21cmを測る。平面はほぼ長方形になるものと推測できる。断面は壁がほぼ直立する方形であり、底は平坦である。遺物は出土していない。

9号土坑（第8図・図版2）

調査区北側で検出した。7号土坑、8号土坑と重複する。一部調査区外に広がっている。確認できた形状で東西115cm、南北150cm、深さ22cmを測る。平面形は一部を確認できたのみであり、不明である。断面は壁のほぼ直立する方形を呈していたものと推測される。底は平坦である。遺物は出土しなかった。（山﨑）

(3) ピット

今回の調査では11基のピットを検出した。土坑より小規模なものを便宜的にピットとして扱った。大部分が遺物を伴わないため所属時期が不明である。

1号ピット（第9図・図版2）

調査区北側で検出した。長軸34cm、短軸25cm、深さ15cmを測る。平面は長楕円形、断面鍋底状をなし、底はほぼ平坦である。

出土遺物は中世かわらけ片が1点(第10図1)、出土しているのみである。

2号ピット（第9図）

調査区中央で検出した。一部、調査区外に広がる。長軸40cm、深さ23cmを測る。断面U字形となる。出土遺物は検出していない。

3号ピット（第9図・図版3）

調査区北側から検出した。試掘坑2とした地点に相当し、試掘調査時は一括個体と考えられる甕形土器（第10図5～12）や焼土と伴に被熱を受けた礫を検出したため、カマドの一部と推定したが、調査では僅かな掘り込みを確認できたにすぎなかった。長軸60cm、短軸58cm、深さ29cmを測り、平面は不整円形、断面は不整形を呈す。

出土遺物は、いわゆる甲斐型の甕（第10図2）が出土している。

4号ピット（第9図）

調査区中央から検出した。長軸65cm、短軸52cm、深さ22cmを測る。中央に一段掘り込みがある。平面は不整円形となる。遺物は出土していない。

5号ピット（第9図）

調査区中央で検出した。長軸約28cm、短軸約17cm、深さ5cmを測る。平面は円形、断面皿状を呈する。出土遺物はなく、僅かな掘り込みが確認されたにすぎない。

6号ピット（第9図・図版2）

調査区北側で検出した。長軸24cm、短軸22cm、深さ20cmを測る。平面は略円形であり、断面U字状を呈す。出土遺物は、確認できなかった。

7号ピット（第9図）

調査区中央から検出した。径19cm、深さ10cmを測る。平面円形となる。出土遺物は検出されなかった。

8号ピット（第9図・図版2）

調査区南側から検出した。6号土坑と重複する。長軸32cm、短軸30cm、深さ16cmを測る。平面は略円形、断面鍋底状となる。土層堆積から6号土坑が先行する。遺物は確認できなかった。

9号ピット（第9図）

調査区南側から検出した。長軸28cm、短軸27cm、深さ6cmを測る。平面略円形となり、断面皿状となる。出土遺物はなく、僅かな掘り込みが確認されたにすぎない。

10号ピット（第9図・図版2）

調査区南側から検出した。長軸35cm、短軸34cm、深さ37cmを測る。平面楕円形となり、断面U字形となる。出土遺物は確認されなかった。

11号ピット（第9図・図版2）

調査区南側から検出した。6号土坑と重複する。長軸30cm、短軸29cm、深さ28cmを測る。平面は略円形、断面U字形となる。土層堆積から6号土坑が先行する。遺物は確認できなかった。

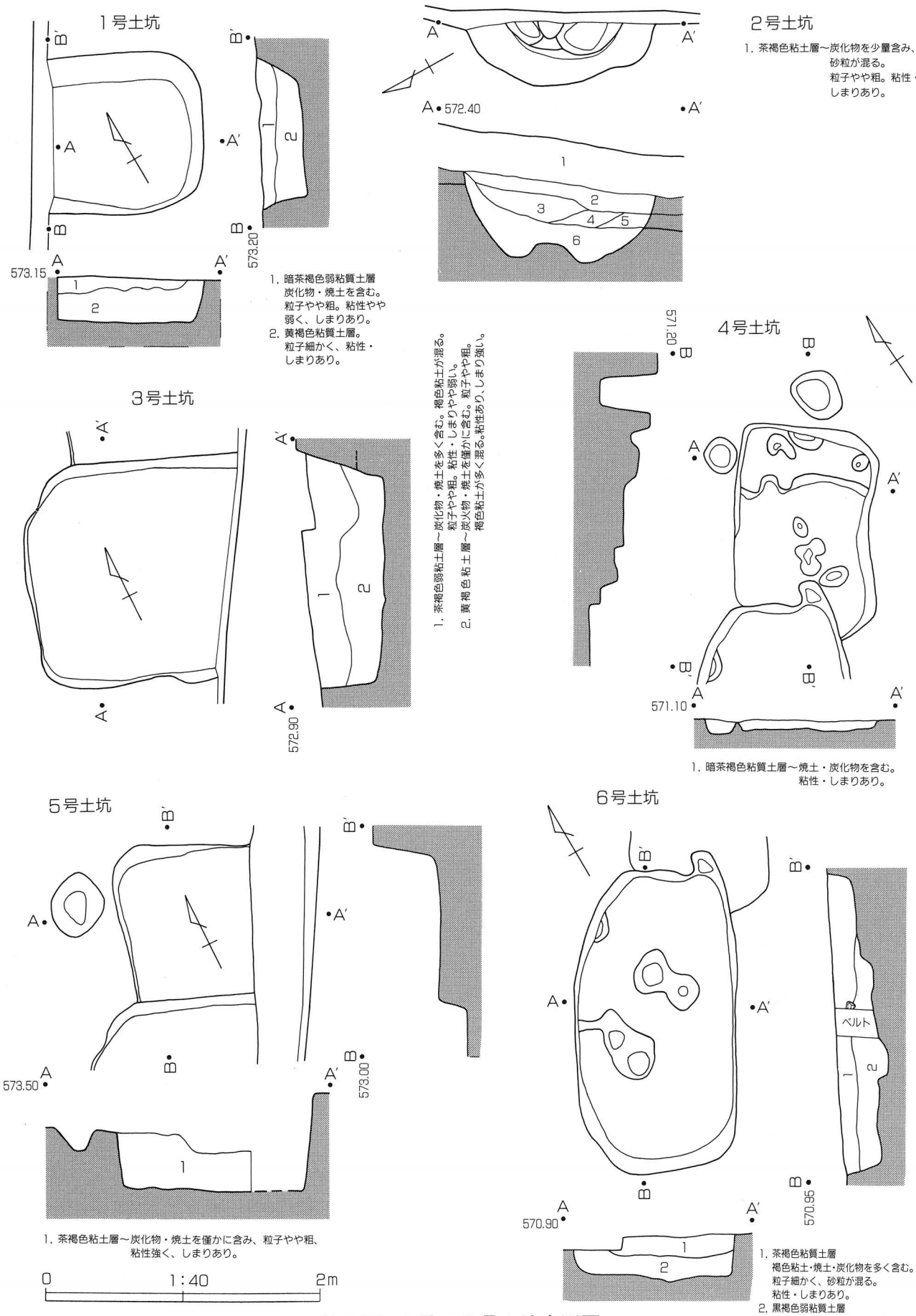
(4) 遺構外出土遺物（第10図3～27・図版3）

ここでは試掘調査時の出土遺物、及び遺構に伴わない遺物を取り上げる。調査では縄文土器から近現代に至るまでの土器・陶磁器が出土している。いずれも細片となったものばかりであった。

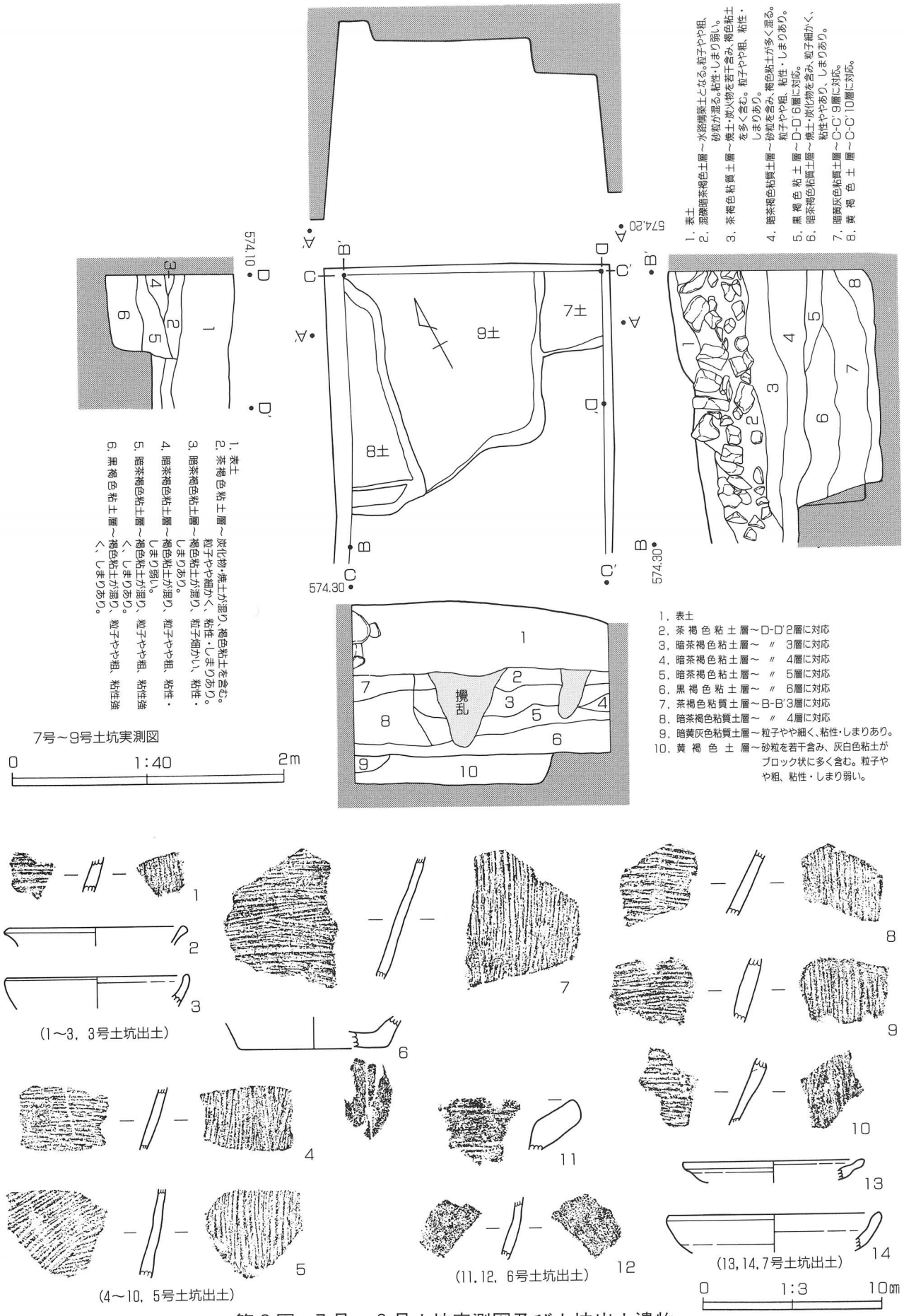
3，4は試掘坑1から出土したものである。3は戦国期のかわらけ底部片である。底部に糸切り痕を残す。4は縄文土器の深鉢であろうか。摩耗が著しい。5～12は試掘坑2から出土したものである。いずれも平安時代で、内外面がハケメ調整される、いわゆる甲斐型の甕である。同一個体と考えられよう。ピット3出土土器と接合する資料が存在した。

13～27が遺構に伴わない遺物となる。13は表採遺物である。縄文土器の深鉢底部片となろう。14，15は、いわゆる甲斐型の甕である。16～18，23は須恵器片を取り上げた。16，17，23は甕もしくは壺の胴部となろう。18は坏底部である。回転糸切り後に底部外周をヘラケズリしている。8世紀前半代に位置づけられよう。19～22は戦国期のかわらけ底部片である。いずれも底部に糸切り痕を残すものである。24は瀬戸美濃産の灰釉四耳壺、瓶子等の胴部片である。25，26は瀬戸美濃産、近現代の陶器である。所属時期は定かではないが、25は卸皿であろうか、卸目が僅かに確認できる。26は大皿であろうか、内外面、高台内及び畳付まで施釉されている。27は刀子であろうか、先端部・基部が欠損する。

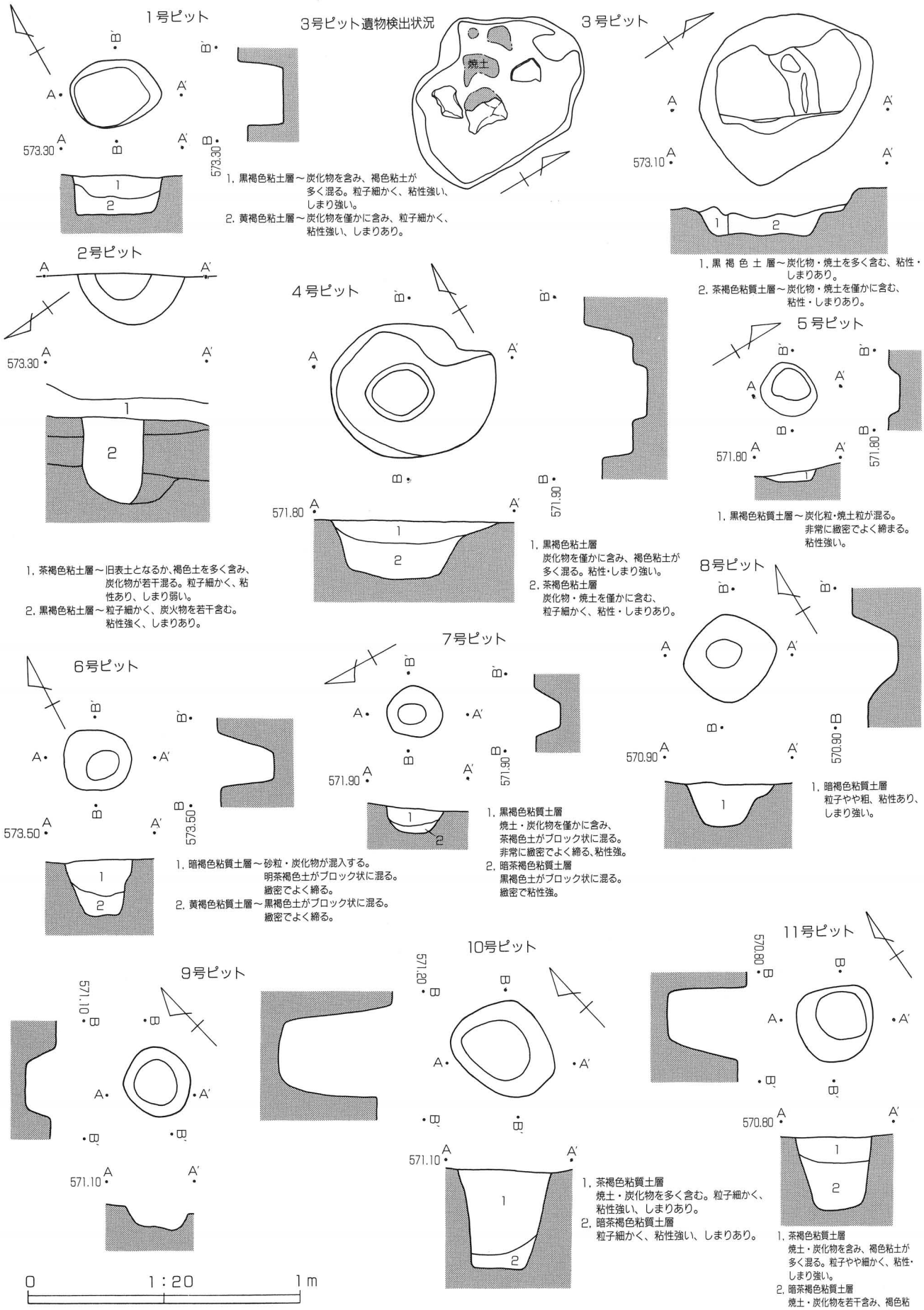
（伊藤）



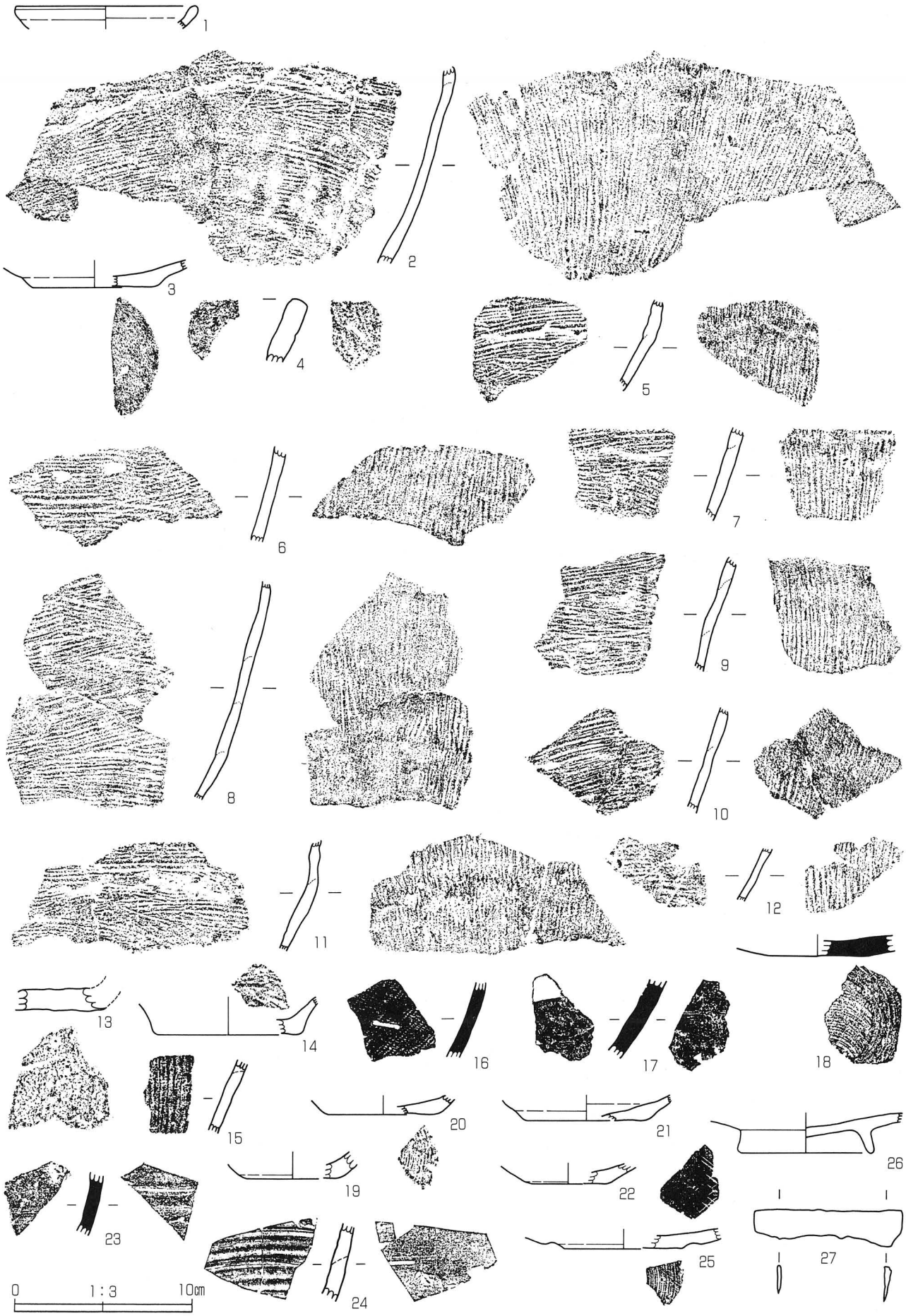
第７図　１号～６号土坑実測図



第８図　７号～９号土坑実測図及び土坑出土遺物



第９図　１号～11号ピット実測図


1
2
3
4
5
6
7
8
9
10
11
12
13
14
15
16
17
18
19
20
21
22
23
24
25
26
27
0
1:3
10cm

第10図　出　土　遺　物

久保之沢遺跡出土遺物観察表

図	番号	出土位置	種別・器種	法量(cm) 口径	底径	器高	部位	観察所見(調整・文様・その他)	胎土	色調	備考(時代等)
6	1	水路跡	須恵器　壺or甕				胴部	ロクロ整形	密	灰色	平安時代
6	2	水路跡	青磁　折縁皿	(14.8)			口縁～胴部		緻密		13c後半～14c前半
6	3	水路跡	瀬戸美濃陶器 仏飯器(小坏？)	(5.7)			口縁～胴部	外面胴下半まで長石釉	密		江戸時代後期
6	4	水路跡	瀬戸美濃磁器 徳利		(5.3)		底部	畳付・高台内面無釉	密		近代
8	1	3号土坑	土師器　甕				胴部	内面横ハケメ、外面縦ハケメ	やや粗	鈍い赤褐色	平安時代
8	2	3号土坑	かわらけ	(9.6)			口縁部	ロクロ成形	やや粗	明褐色	戦国期
8	3	3号土坑	土師器　坏	(10.0)			口縁部	ロクロ成形	密	鈍い褐色	平安時代
8	4	5号土坑	土師器　甕				胴部	内面横ハケメ、外面縦ハケメ	やや粗	赤褐色	平安時代
8	5	5号土坑	土師器　甕				胴部	内面横ハケメ、外面縦ハケメ	やや粗	鈍い赤褐色	平安時代
8	6	5号土坑	土師器　甕		(5.6)		底部	底部木葉痕、内面横ハケメ、外面縦ハケメ	やや粗	赤褐色	平安時代
8	7	5号土坑	土師器　甕				胴部	内面横ハケメ、外面縦ハケメ	やや粗	鈍い赤褐色	平安時代
8	8	5号土坑	土師器　甕				胴部	内面横ハケメ、外面縦ハケメ	やや粗	赤褐色	平安時代
8	9	5号土坑	土師器　甕				胴部	内面横ハケメ、外面縦ハケメ	やや粗	赤褐色	平安時代
8	10	5号土坑	土師器　甕				胴部	内面横ハケメ、外面縦ハケメ	やや粗	赤褐色	平安時代
8	11	6号土坑	土師器　甕				口縁部	ロクロ整形後、内面横ハケメ	やや粗	明褐色	平安時代
8	12	6号土坑	土師器　甕				胴部	内面指頭痕・横ハケメ、外面縦ハケメ	やや粗	橙色	平安時代
8	13	7号土坑	かわらけ	(10.0)			口縁部	ロクロ成形	密	橙色	戦国期
8	14	7号土坑	かわらけ	(11.7)			口縁部	ロクロ成形	密	鈍い橙色	戦国期
10	1	1号ピット	かわらけ	(9.7)			口縁部	ロクロ成形	密	鈍い橙色	戦国期
10	2	3号ピット	土師器　甕				胴部	内面指頭痕・横ハケメ、外面縦ハケメ、接合痕あり	やや粗	鈍い赤褐色	平安時代
10	3	試掘坑1	かわらけ		(6.9)		底部	ロクロ成形、底部回転糸切り	密	橙色	戦国期
10	4	試掘坑1	縄文土器　深鉢				口縁部	ナデ調整	やや粗	鈍い赤褐色	縄文時代
10	5	試掘坑2	土師器　甕				胴部	内面横ハケメ、外面縦ハケメ、接合痕あり	やや粗	赤褐色	平安時代
10	6	試掘坑2	土師器　甕				胴部	内面横ハケメ、外面縦ハケメ	やや粗	赤褐色	平安時代
10	7	試掘坑2	土師器　甕				胴部	内面横ハケメ、外面縦ハケメ、接合痕あり	やや粗	鈍い赤褐色	平安時代
10	8	試掘坑2	土師器　甕				胴部	内面横ハケメ、外面縦ハケメ、接合痕あり	やや粗	鈍い赤褐色	平安時代
10	9	試掘坑2	土師器　甕				胴部	内面横ハケメ、外面縦ハケメ、接合痕あり	やや粗	鈍い褐色	平安時代
10	10	試掘坑2	土師器　甕				胴部	内面横ハケメ、外面縦ハケメ、接合痕あり	やや粗	暗赤褐色	平安時代
10	11	試掘坑2	土師器　甕				胴部	内面横ハケメ、外面縦ハケメ、接合痕あり	やや粗	鈍い赤褐色	平安時代
10	12	試掘坑2	土師器　甕				胴部	内面指頭痕・横ハケメ、外面縦ハケメ	やや粗	褐色	平安時代
10	13	表採	縄文土器 深鉢(？)				底部	ナデ調整	やや密	鈍い褐色	縄文時代
10	14	遺構外出土	土師器　甕		(7.8)		底部	底部木葉痕、内面横ハケメ	やや粗	明赤褐色	平安時代
10	15	遺構外出土	土師器　甕				胴部	内面ナデ、外面縦ハケメ	やや粗	黄褐色	平安時代
10	16	遺構外出土	須恵器　壺or甕				胴部	内面指ナデ、外面叩き目	密	暗灰色	平安時代
10	17	遺構外出土	須恵器　壺or甕				胴部	内外面ロクロ整形、内面指頭痕	密	暗灰色	平安時代
10	18	遺構外出土	須恵器　坏		(5.7)		底部	底部回転糸切り後、外周のみ回転ヘラケズリ	密	暗灰色	奈良時代
10	19	遺構外出土	かわらけ		(5.4)		底部	ロクロ成形、底部回転糸切り	密	赤褐色	戦国期
10	20	遺構外出土	かわらけ		(6.2)		底部	ロクロ成形、底部回転糸切り	密	鈍い橙色	戦国期
10	21	遺構外出土	かわらけ		(6.3)		底部	ロクロ成形、底部回転糸切り	密	橙色	戦国期
10	22	遺構外出土	かわらけ		(5.0)		底部	ロクロ成形、底部回転糸切り	密	暗茶褐色	戦国期
10	23	遺構外出土	須恵器　壺or甕				胴部	内面指頭痕、内外面ロクロ整形	密	黒褐色	平安時代
10	24	遺構外出土	瀬戸美濃灰釉陶器 四耳壺(瓶子？)				胴部	内外面ロクロ整形、外面ヘラケズリ	密	灰白色	中世
10	25	遺構外出土	瀬戸美濃　卸皿？		(6.6)		底部	底部回転糸切り痕、卸目？あり	やや密	灰白色	近現代？
10	26	遺構外出土	国産陶器　大皿？		(7.2)		底部	内外面・高台内・畳付施釉	密		近現代？
10	27	遺構外出土	金属製品	残存長8.2，幅2.0							

第4章　まとめ

今回の調査に際して確認された遺構は水路1条、土坑9基及びピット11基と僅かであった。出土遺物からは縄文時代から近現代に至るまで多くの遺物が検出され、すでに縄文時代より人々の足跡が確認されることとなった。

残念ながら今回の調査では縄文時代に位置づけられる明確な遺構は確認できず、人々の確実な足跡は平安時代からとなる。5号土坑・3号ピット、更には6号土坑なども平安期に属す遺構となろう。出土した遺物の時期差を考慮しなければ、この時代の食膳具・煮炊具及び貯蔵具と日常生活において必要とされる土器類は揃っていることになる。遺跡周辺一帯を大きく居住域と捉えることが可能となる。

再び遺跡に、人々の確実な痕跡が刻まれるのは中世戦国期であろう。出土遺物が少なく時代特定に問題を残すものの、3号土坑・7号土坑、1号ピットなどがこの時代に属す遺構となろう。出土したこの時代の遺物の中に調理具・煮炊具など日常生活を送るうえで欠かせない土器類はまったく見られない。住空間とは異なる空間が想定され、奈良・平安期と中世戦国期との集落は大きく変化していることが窺われる。

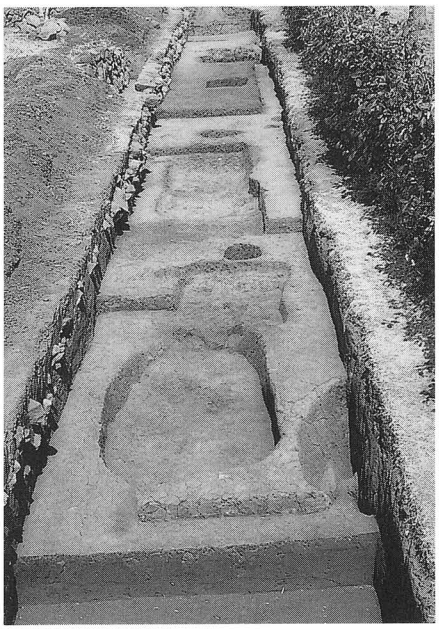
きわめて小規模な調査であったが、今日まで調査事例が少ない市内北部地域において、組織的な調査が実施された遺跡の一つとなったこと、更には、前述したように過去において、すでに耕地整理が実施されていたにもかかわらず、依然として遺跡は存在しており、調査によりその一端が明らかになったことなどを考え合わせれば、今回の発掘調査は貴重な成果が得られたこととなる。（伊藤）

参考文献

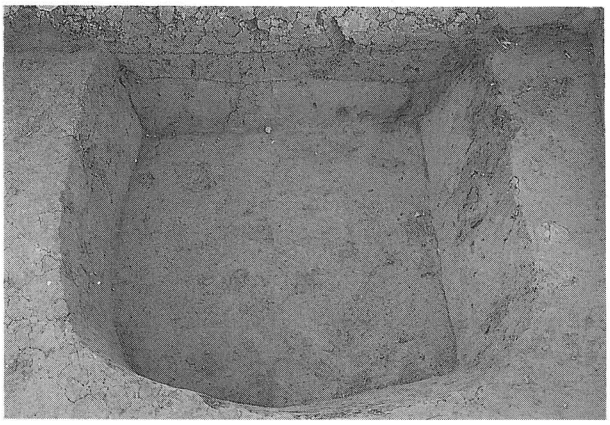
1．甲府市市史編さん委員会編『甲府市史　史料編第一巻』 1989
2．甲府市市史編さん委員会編『甲府市史　通史編第三巻』 1990
3．敷島町教育委員会編『遺跡詳細分布調査報告書』 1994
4．『日本歴史地名大系19　山梨県の地名』平凡社 1995
5．大日本地誌大系『甲斐国志』第一・第二巻　雄山閣　1998
6．山梨郷土研究会編『山梨の歴史景観』山梨日日新聞出版局　1999
7．萩原三雄監修『図説甲府の歴史』郷土出版社　2000

図版 1

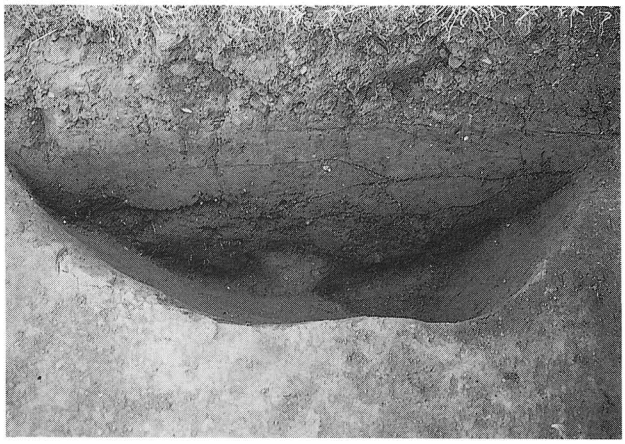
水路跡



遺跡全体

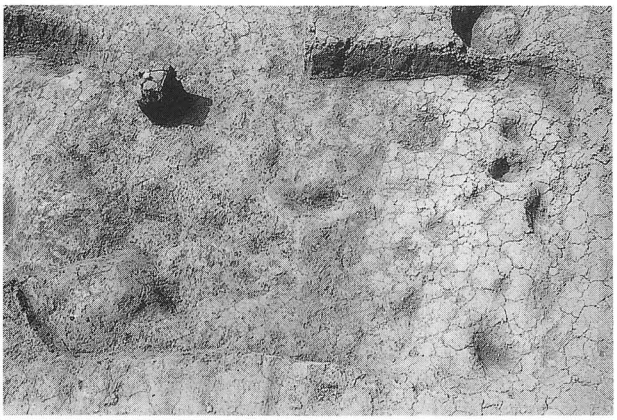


1 号土坑

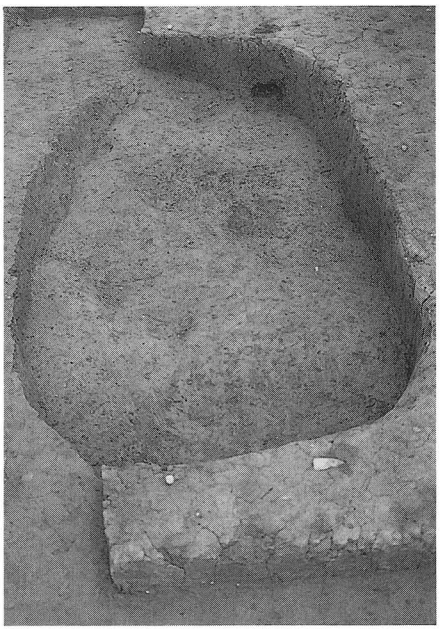


2 号土坑

3，5 号土坑



4 号土坑



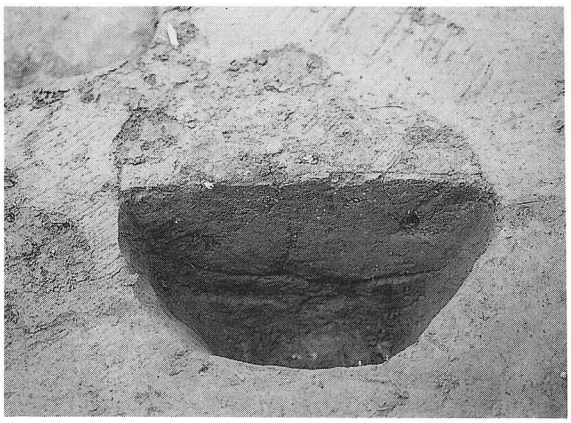
6 号土坑

7～8号土坑

調査状況

1号ピット

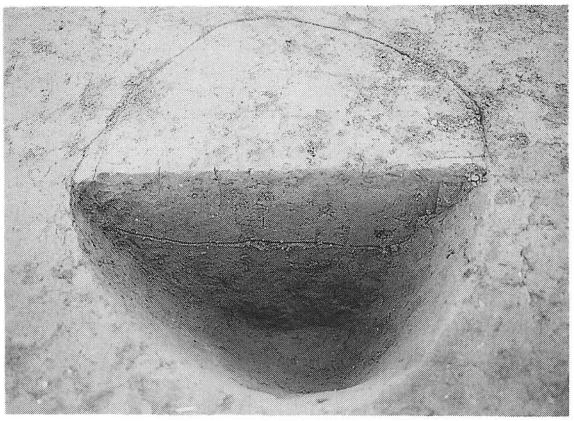
3号ピット遺物検出状況



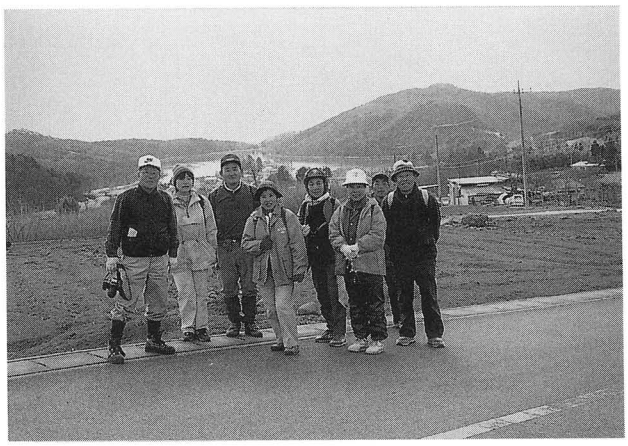
6号ピット

8号ピット

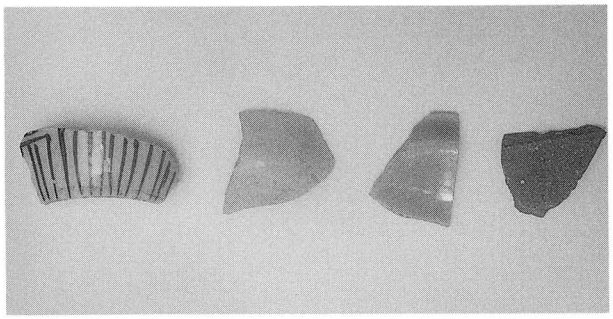
10号ピット



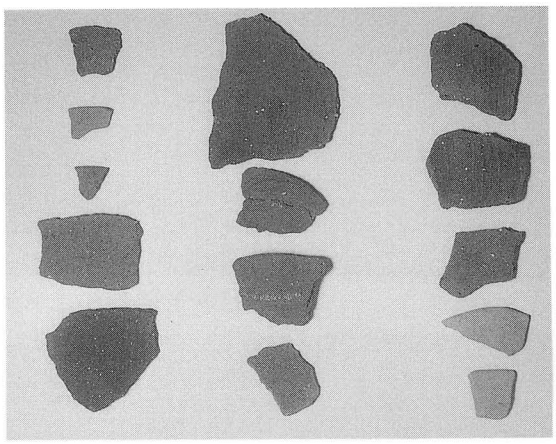
11号ピット



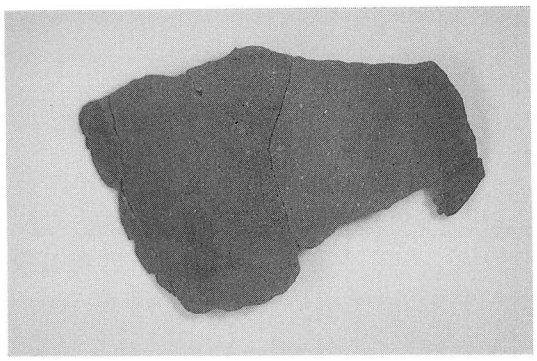
調査参加者



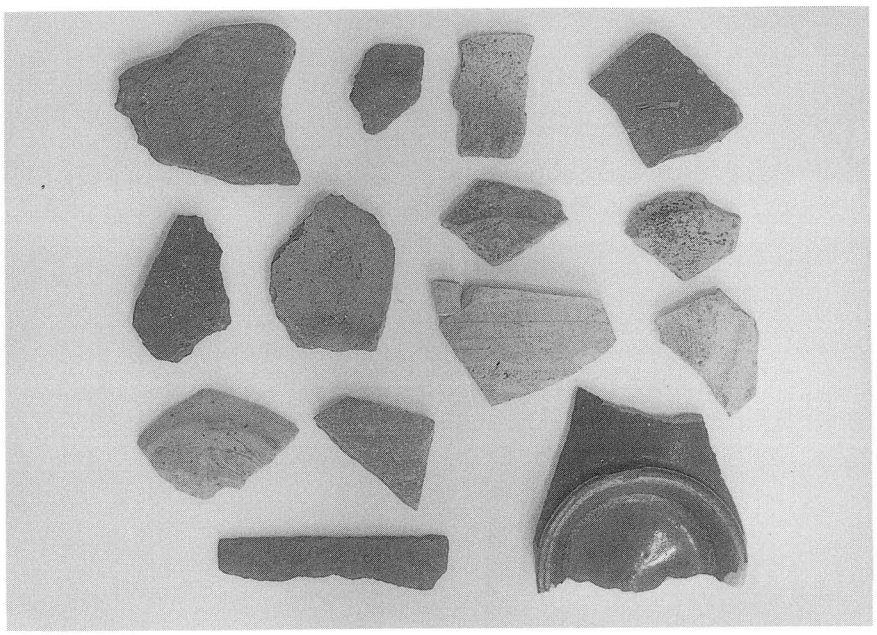
水路跡出土遺物



土坑出土遺物



3 号ピット出土遺物



遺構外出土遺物

報　告　書　抄　録

ふりがな	くぼのさわいせき
書名	久保之沢遺跡
副書名	農道改良工事に伴う発掘調査報告書
巻次	
シリーズ名	甲府市文化財調査報告
シリーズ番号	13
編集機関	甲府市教育委員会
所在地	〒400-8585 山梨県甲府市丸の内一丁目18番１号　電話 055(223)7324
発行年月日	平成13年３月30日

ふりがな 所収遺跡名	ふりがな 所在地	コード 市町村	コード 遺跡番号	北緯 °′″	東経 °′″	調査期間 調査面積	調査原因
久保之沢（くぼのさわ）遺跡（いせき）	山梨県甲府市（やまなしけんこうふし）下帯那町字（しもおびなちょうあざ）久保之沢（くぼのさわ）地内	19201		35°42′06″	138°33′48″	20000221～20000324 62m²	農道改良工事

所収遺跡名	種別	主な時代	主な遺構	主な遺物	特記事項
久保之沢遺跡	散布地	縄文・平安・中世	水路跡、土坑、ピット	縄文土器、土師器、須恵器、かわらけ	

甲府市文化財調査報告13

久　保　之　沢　遺　跡

― 農道改良工事に伴う発掘調査報告書 ―

平成13年３月30日

発行　甲府市
　　甲府市教育委員会

印刷　㈱内田印刷所
　　〒400-0032 山梨県甲府市中央二丁目10-18